

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520330

研究課題名(和文) 19世紀アイルランド小説のアイリッシュネスの発展と拡散に関する研究

研究課題名(英文) The Development of "Irishness" in Nineteenth-Century Irish Fiction

研究代表者

中村 哲子 (Nakamura, Tetsuko)

駒澤大学・総合教育研究部・准教授

研究者番号：20237415

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：1801年にアイルランドは政治的にイギリスの傘下に入り、以降、アイルランドの作家はアイルランド性を色濃く打ち出した小説を広くイギリス読者に向けて発表していく。プロテスタントの作家だけでなく、1820年代以降はカトリック出身の作家の活躍も顕著となる。こうした中で、イギリスからの旅行者がアイルランドの実態を語る旅行記を数多く発表するようになる。小説と旅行記を読み解くことから、イギリスとアイルランドの双方の視点から見るアイルランド性の諸相を浮彫にした。

研究成果の概要(英文)：After the Acts of Union 1800, Irish-based fiction writers attracted the attention of the British through their representations of the Irish and their lives. Anglo-Irish Protestant writers and, starting in the 1820s, Catholic writers produced novels they hoped would meet the expectations of British readers, whose interest in their sister island was spurred by the political and religious contexts of the time. From the 1820s onwards, this encouraged many British visitors to Ireland to produce their own travel writings and publish their views on Irishness.

The study reported here focused on the notions of Irishness presented in fiction and travelogues written from different perspectives, and attempted to clarify the similarities and discrepancies. The significance of the visual images published in some travel books was also analyzed.

研究分野：英語圏文学

キーワード：アイルランド 小説 旅行記 地域性 カトリック

1. 研究開始当初の背景

(1) アイルランド小説の一系譜に、1800年に刊行されたマライア・エッジワースの『ラックレント城』に始まり今日までたどることのできるビッグ・ハウス小説と呼ばれる小説群がある。地主の館を舞台としたこうした小説は、プロテスタントのアングロ・アイリッシュの作家が自らの周辺から材を取り、ある地主一家の抱えるその伝統と現実社会との軋轢を、彼らが接点を持つアイルランド人との関わりをとおして描いたものである。本研究者は、ビッグ・ハウス小説研究をとおして、イギリスのカントリー・ハウスを舞台とした小説には見られない、アイルランドの歴史的・宗教的・政治的なコンテクストの重要性を強く認識するに至り、イギリスの読者が注目するアイルランド性の諸相を詳らかにすることに意義があると考えていた。

(2) アングロ・アイリッシュのプロテスタント作家は、ビッグ・ハウス小説において、館の使用人や村人を描く中でカトリックの世界を垣間見せている。しかし、その描きかたは限定的であり、ある種の危険性を孕むカトリックの民衆が厄介で不可解なものであるとの印象を浮かび上がらせる傾向が強い点を認識していた。

(3) 以上から、カトリックの民衆の視点からアイルランドを描く小説にも目を向け、そこに描かれるアイルランド性とその受容について考察することに意義があると考えていた。カトリック出身の作家がいかなるアイルランド性を作品に取り込み、イギリス読者の需要に応え、あるいは、需要を開拓しようとしていたかを探ることに、大いに関心があった。イギリスとアイルランドの支配する者とされる者の関係性の中で、アイルランドを捉える視線の複数性を具体的に明らかにすることが、19世紀アイルランド研究に資するものと認識していた。

2. 研究の目的

(1) アイルランドがイギリスに併合された後に、アイルランドの作家がアイルランド性をどのように捉え、どのように発信しようとしていたかについて、アングロ・アイリッシュおよびカトリック出身の小説家のアプローチを明らかにする。

(2) 当初小説研究を念頭に置いていたが、イギリス人旅行者の手になる旅行記に目を向けることで、イギリス読者がいかなる側面にアイルランド性を見出そうとしていたかがより明確になると認識された。そこで、旅行記に描かれている旅行者のアイルランド的なものへの関心のありかを明らかにすることとした。

(3) アイルランド小説と旅行記から読み取れるアイルランド内外の複数の視点が交錯するあり様について、歴史的・文化的なコンテクストを踏まえて明らかにする。

3. 研究の方法

次のような手順にて研究を展開した。

(1) 関連小説および旅行記のテキストの確認・収集： 海外図書館所蔵本の現地での確認と複写物の入手、 海外図書館所蔵本のデジタル複写物の入手、 大学図書館の各種データベースでの確認とデジタル資料の入手、 インターネット上のデジタル文献の確認とデジタル資料の入手。

(2) 関連文献に付随する図版の確認・収集： 海外図書館所蔵本の現地での確認と写真撮影による入手、 当該文献の購入による確認・入手。

(3) 関連研究文献の収集： 当該文献の購入による入手、 大学図書館の各種データベースからのデジタル資料の入手。

(4) 入手資料の分類と整理：(1)と(2)で入手した資料を時代、ジャンル別に分類、整理。

(5) 入手資料についての分析・考察： テキストの読みおよび図版の観察に基づき、分析・考察をまとめた。

(6) 研究成果の取りまとめと公表： 考察結果を論考としてまとめ、論文や学会での口頭発表の形で公表。口頭発表の際には、研究の方向や方策について参加者から有意義な助言を得ることができた。

4. 研究成果

(1) カトリック出身の作家(ジョン・バニム、マイケル・バニム、ウィリアム・カールトン、ジョージ・ムア等)の諸作品では、カトリックのコミュニティーに軸足を置いた世界観の中で、ビッグ・ハウスや地主一家が描かれ、カトリックの民衆の目に映る権力を持つ階層のあり様が批判的に描かれる傾向が確認できた。

ここで注目すべきは、小作人の一家に育つ優秀な男子が、地元の司祭の助けを得て聖職に就くことを目指す姿で、そこにはアイルランド的教養小説(Bildungsroman)のあり様を見て取ることができる。往々にして、このカトリック的出世物語は挫折し、民衆の置かれた厳しい環境を訴えるものとして認識できる。その際、登場人物は、アイルランドの地方から司祭となるべき教育を受けるためにメヌースに赴いたり、都市ダブリンで生活の糧を得ようとしたり、アメリカ大陸に渡るなど、旅のモチーフが小説に織り込まれている。必ずしもその目がイギリス本土に向けられてはいない点は、注目できる((3)を参照)。

(2) ウィリアム・カールトンは、アイルランドの小作人の家庭に育ち、後にプロテスタントに改宗した作家だが、イギリスへのアイルランド併合後の時代に、カトリックのアイルランド人を描くことがアイルランド文学伝統を堅持することと考え、アングロ・アイリッシュの作家が描くことが困難な空間を描出した。カールトンの描くカトリックのコミュニティーには、司祭や将来司祭になるこ

とを目指す知的訓練を受けた人物たちが、日々の暮らしに追われる大衆と一定の距離感をもって描かれている。このカトリックのコミュニティーにおける立場の違いを描く視線は、アングロ・アイリッシュの作家が、プロテスタントの立場からカトリックの世界を描くものと類比的に捉えられ、アイルランド社会の重層性が、異なる立場に所属する作家の作品をとおして読み取れる。

このように、1820年代以降、アイルランド発信の小説をとおしてイギリスの読者がアイルランドの抱える諸相を感得できる状況が生まれたといえる。この点は、当時の諸雑誌に掲載された書評などから明らかであり、イギリスに流入するアイルランド物への驚愕と嫌悪までもが示されている点は注目できる。イギリス読者のアイルランドへの関心のあり様が理解できる。

(3) 19世紀前半のアングロ・アイリッシュおよびカトリック出身の作家の描く小説には、主たる登場人物たちが旅をするモチーフが散見される。前者の場合、イギリス本土から未知なるアイルランド、辺境の地であるコナハトへ赴き、アイルランドならではの神話と伝説の世界を読者に提供する枠組みを持つものが目を引く。(後者については(1)参照。)

この背景には、大陸との戦争や政治的意図から、19世紀初頭よりイギリス本土からアイルランドへ赴く旅行者が徐々に増加し、交通インフラ整備ともあいまって1820年頃から1830年代へと、多くの旅行者が辺境地帯まで入り込み、カトリックのアイルランドの実態を伝える機会が急速に増えていった事実がある。

旅は一般に文学伝統において、鍵となるモチーフであるが、アイルランド小説ではダブリンやコークなどの都市以上に、辺境に住むアイルランド人のコミュニティーを描くことが、イギリス読者に魅力的に映ったものと理解できる。この点が明確に認識できたのは、イギリス人やアングロ・アイリッシュの手になる旅行記がいかなる地域や慣習に注目して多くの読者の関心を得ようとしているかに注目した結果である。(詳細は(4)を参照。)

(4) イギリス人やアングロ・アイリッシュによる旅行記は1820年頃から急速に増加するが、それ以前には、ダブリンの勇壮な建築物や自然豊かな美しい風景を図版入りで解説する旅行案内に類した刊行物が中心的なものであった。アイルランドのピクチャレスクを印象づけるものだが、徐々に旅行者自らが自身のアイルランドの旅を語ることに主眼を置いた刊行物が目立ってくる。

この種の初期の代表作に、チャールズ・クロフトン・クローカーの南アイルランドの旅を描いた刊行物(1824年)がある。アングロ・アイリッシュのクローカーは、南アイルランドの由緒ある遺跡やアイルランド民衆の集

う場所を訪れ、そのあり様を旅物語の枠組みで著し、一見旅行記とは判断しにくいタイトルをつけて刊行した。その翌年には、南アイルランドの伝説物語を編集した物語集を上梓し、この2点の刊行物が多いイギリス読者の注目を集めた結果、クローカーの文学者としての立場も確立する。アイルランド人の歴史と慣習を意識したアプローチがいかに当時の読者の求めるものであったかが、理解できる。この時期に、西アイルランド辺境のコネマラに移り住んだ地主がまだインフラも整わぬこの地域のあり様を初めて1巻本にまとめた著作(1824年)もイギリスで注目を集めたほか、カトリック出身の作家たちも頭角を現してくる。

旅行記を視野に入れ、小説に描かれたアイルランドの諸相を眺めると、そこにはアイルランドの歴史、神話、伝説に彩られた辺境の地域へのまなざしが特徴的なものとして浮かび上がってくる。コーク以西の南西地域、ゴールウェイ以西のコネマラ地域、メイヨー州やドニゴール州といった地域が、その実態が広く知られていなかっただけに、多くの読者にとってアイルランド的な要素に満ちた地域として受け取られたと捉えられる。この文脈においては、1820年あたりから急速に増加する刊本に挿入される図版が、アイルランドらしさを主張する重要な役割を担っていたことも明確になってきた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

Tetsuko Nakamura, Interactions between Travel Narrative and Short Fiction: Stories Revolving around St. Patrick's Purgatory, 1827-1843, *Studies in English Literature*, English Number 56 (2015), pp. 39-56.
査読有

Tetsuko Nakamura, Visual Representations of Irishness with Special Reference to Croker's *Researches in the South of Ireland* (1824), *Semiannual Periodical of the Faculty of Arts and Sciences, Department of English and Department of Foreign Languages* (Komazawa University), 18 (2015), pp. 57-75.
<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/34756/?lang=0&mode=0&opkey=R143281432825523&idx=5>

Tetsuko Nakamura, Daniel Maclise's Representations of Irishness: His Drawings in John Barrow's *Tour round Ireland* (1836), *Odysseus* (University of Tokyo), 17 (2013), pp. 41-57.
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/>

handle/2261/53577

中村哲子、アングロ・アイリッシュの揺らぎと可能性、『エール アイルランド研究』31 (2012), pp. 3-9. 査読有

Tetsuko Nakamura, 'Irish' Quests in Catholic-Oriented Novels of the 1820s and 1830s: The Banim Brothers and William Carleton, *Journal of Irish Studies*, 26 (2011), pp. 38-51. 査読有

Yuko Matsui, Tetsuko Nakamura, and Haruko Takakuwa, British Identities in Scottish and Irish Contexts in Early Nineteenth-Century Fiction, *Journal of Irish Studies*, 26 (2011), pp. 3-9. 査読有

[学会発表] (計 6 件)

Tetsuko Nakamura, Pluralism in Representations of Irishness in Travel Books in the Pre-Famine Era (Symposium: Images of Irish Culture), 31st Conference, International Association for the Study of Irish Literatures in Japan (Waseda University, Tokyo), October 2014.

Tetsuko Nakamura, Urban Misery in Fiction and Reality during the Decade of Controversy over the Irish Poor Law, 2013 Conference, International Association for the Study of Irish Literatures (Queen's University Belfast, UK), July 2013.

Tetsuko Nakamura, Promoting Irishness: Interactions between Travel Narratives and Short Fiction in the 1820s and 1830s, Conference 'The Irish Short Story' (Catholic University of Leuven, Belgium), November 2012.

Tetsuko Nakamura, 'No Picture Drawn by the Pencil – None by the Pen – Can Possibly Convey an Idea of the Sad Reality': Travel Books and Illustrated Drawings in the Early 19th Century, 2012 Conference, International Association for the Study of Irish Literatures (Concordia University, Canada), August 2012.

Tetsuko Nakamura, The Irish as Seen through the Eyes of the British in the 1830s: Travel Writing and Controversy over the Irish Poor Law, 7th Biennial Conference, International Society for Travel Writing (Georgetown University, U.S.A.), March 2012.

Tetsuko Nakamura, Conflicting Images of Irishness: Travel Accounts of Connemara and Joyce Country in the 1830s, 2011

Conference, International Association for the Study of Irish Literatures (Catholic University of Leuven, Belgium), July 2011.

[図書] (計 1 件)

中村哲子、聖パトリックの煉獄への旅 煉獄譚からダーク湖旅行へ 『チョーサーと英米文学 河崎征俊教授退官記念論文集』東雄一郎、川崎浩太郎、狩野晃一編、金星堂、2015、pp. 75-89.

[産業財産権]

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 哲子 (NAKAMURA, Tetsuko)
駒澤大学・総合教育研究部・准教授
研究者番号：20237415

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：